

中山間地域における地域コミュニティ形成の可能性  
 - 岐阜県中津川市加子母地域の空き家活用を通じて -

指導教員 加茂紀和子 教授

杉本祐也

**【1】 研究の背景と目的** 岐阜県中津川市加子母では高齢化、人口減少傾向にあり、増加する空き家<sup>(1)</sup>の対策とU・Iターンができる仕組みづくりが必要となってきた。また、加子母での居住意向を1995年と2022年で比較すると、住みたいと強く感じている人の割合が減少してきている(図1)ことから、魅力ある地域づくりが必要である。一方で、加子母には地元企業やNPOの支援によって学生が活動をしやすい環境が整えられている。そのため毎年約200人の大学生が全国各地から集い、宿泊しながらそれぞれの活動を行なっている(図2)。その結果、加子母に一時滞在する大学生が企画・運営する地域のイベントが多く開かれるなど、地域の賑わいづくりの一翼を担っているといえる。そういった活動を通して加子母に愛着を持ち、卒業後に多拠点居住の1つとして2023年度から加子母に移住する若者が複数人現れた。移住先として加子母の空き家の1つであった中桑原に位置する岩野屋(図3)を活用している。2024年度現在も改修をしながら生活の拠点を築いており、地域外の人と加子母地域の人々を繋ぐ場所となることが期待されている。現在は3名の住人の他に筆者を含めた大学生2名が主に利用しており、地域外からの来訪者が集う場所となっている。このように岩野屋では地域外の人との交流は多く見られるが、地域の人との交流が少ない現状がある。

本研究では、加子母地域の人々と共に考える住民参加型の空き家活用を岩野屋にて実践する。そして地域内外の人の交流を生み出す中山間地域における地域コミュニティ形成の新たな可能性を示すとともに、空き家活用の一助となることを目的とする。

**【2】 研究の流れ** 本研究では①加子母の空き家の現状調査を行ない、②地域住民がまちづくりについて話し合う場の「地域づくり分科会<sup>(3)</sup>」に参加し、空き家活用ワークショップ(以下WS)を実施した。③WSのアンケート結果から地域活性化に向けて、岩野屋活用への可能性と展望を述べる(図4)。

**【3】 加子母地域の空き家の現状** 空き家対策検討委員会<sup>(4)</sup>が作成した「空き家調査一覧表」に掲載されている52軒(2023年6月23日現在)についての分析を行なった。加子母地域内10区のどの地区も4軒以上の空き家があり空き家の分布に大きな偏りはないが、その中で最も空き家が多く分布している

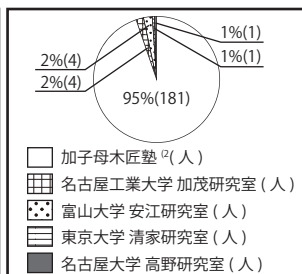
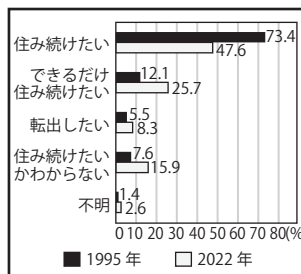


図1 加子母での居住意向の比較

図2 2024年度に加子母で活動に参加した団体



図3 岩野屋外観

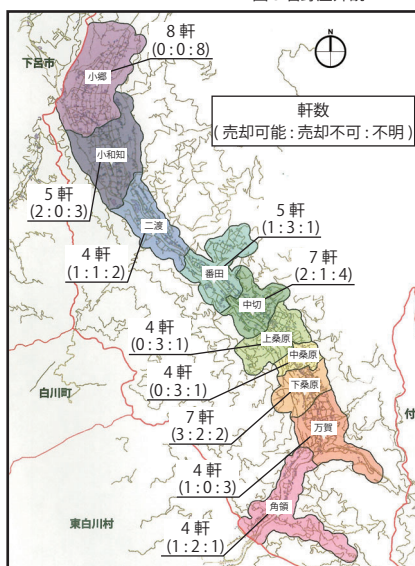


図5 加子母の空き家分布

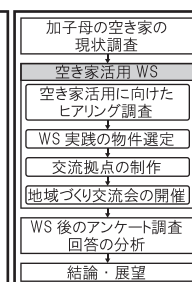


図4 研究の流れ

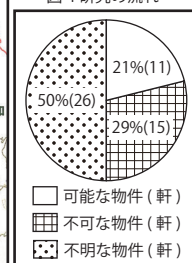


図6 空き家の賃貸・売却の可否

のは小郷(8軒)であり、その全ての物件が賃貸・売却の可否が不明であった。それに対して最も賃貸・売却可能な物件が多いのは下桑原(3軒)で、岩野屋が位置する中桑原地区では、賃貸・売却可能物件が0軒、不可物件が3軒、不明物件が1軒であった(図5)。全地区で賃貸・売却が可能なのは11軒、不可能なのは15軒、不明だったのが26軒という結果であった(図6)。この結果から、所有者との連絡がつかず、半数の空き家が次の買い手や使い道につなげることができない状態になっていることが分かる。一方、約20%の空き家は利活用できる状態であるため、上手く空き家を活用して移住者を誘致していく仕組みづくりが必要である。

**【4】空き家活用 WS の実施** 以下のWSプログラムを地域住民、地域おこし協力隊<sup>6)</sup>、県外大学生と共に実施した。①加子母地域にある空き家活用に向けたヒアリング調査をし、②ヒアリング調査で出た意見を実践するための物件を選定した。その後、③交流拠点となる場所を制作し、④地域づくり交流会の企画・実施をするという流れとした。

**4-1. 空き家活用に向けたヒアリング調査 (WS ①)** 地域づくり分科会に参加した加子母住民を対象に加子母の空き家をどのように利用することができるか、すぐに取り掛かれることは何かあるかについてヒアリング調査を実施した(図7)。その結果、6つの活用方法についての意見を得た(表1)。その中で、最も関心が高かったのが「シェアキッチン(食をつくる、食べる場所)」としての活用であった。加子母では農業が盛んであり食材の生産者が多く、さらにはイベント時に進んで料理をつくる人も多いことから加子母地域では食を通して集まれる場の需要が高いことがヒアリング調査からわかった。

**4-2. 物件の選定 (WS ②)** WSを実践するための物件として、本研究では岩野屋を選定し、オーナーと住人の理解を得て共にその活用を試みた。岩野屋は初代オーナーの死去後、不動産業を営むW氏が購入したものの空き家となっていた。そこでW氏の友人が、2023年5月当時空き家を探していた現オーナーである元加子母木匠塾生のH氏に紹介した。現在ではH氏と他2名が多拠点居住の1つとして居住する場となるとともに、地域外来訪者が集う場所としての機能も担っている(図8)。

**4-3. 交流拠点の制作 (WS ③)** 空き家ヒアリング調査にて、食を囲んで語り合う場への関心が最も高かったことから、①加子母の特色である食材を持ち寄りみんなで食する文化、②加子母の特産品であるトマトを活かすこと、③料理を作る作業をみんなで協力して進めることができるものと考えた。協議の末、窯を制作してその窯を囲んで食の調理から食べることまでを共にすることができる【語り場】としての空間を制作することとした。この【語り場】は、4-1の空き家活用に向けたヒアリング調査で高い関心が示された「シェアキッチン(食をつくる、食べる場所)」の他、「マニアックな体験」「子ども、高齢者の居場所」にも対応するものとする。窯の設置位置については①北側はなれ周辺、②南側軒下の2つの候補について岩野屋の住人と議論を重ねた(図9)。その結果、窯を囲んで集まっている様子が周辺からもよく見え、室内との動線を確保しやすい②南側軒下に設置することが適切と判断し、屋内の3室も整備することで、屋内外の【語り場】を設けることとなった。(図10 網点、斜線部)。


開催日時	2024年7月19日(月) 19:30～20:30
場所	加子母明治座
参加者	加子母住民 7人
運営	名古屋工業大学 加茂研究室 1人、地域おこし協力隊 2人
内容	加子母地域にある空き家をどのように利用できるか。 加子母らしさを活かし、すぐに取り掛かれることはあるか。
日程	<div style="display: flex; flex-direction: column; align-items: center;"> <div style="border: 1px solid black; border-radius: 10px; padding: 5px; margin-bottom: 5px;">ワークショップの目的説明 (5分)</div> <div style="margin-bottom: 5px;">↓</div> <div style="border: 1px solid black; border-radius: 10px; padding: 5px; margin-bottom: 5px;">グループに分かれて意見出し (40分)</div> <div style="margin-bottom: 5px;">↓</div> <div style="border: 1px solid black; border-radius: 10px; padding: 5px; margin-bottom: 5px;">全体で出た意見の共有 (10分)</div> <div style="margin-bottom: 5px;">↓</div> <div style="border: 1px solid black; border-radius: 10px; padding: 5px;">まとめ (5分)</div> </div> 

図7 空き家活用へのヒアリング調査  
表1 空き家活用へのヒアリング調査での意見まとめ

シェアキッチン(食をつくる、食べる場所)	マニアックな体験
食材の生産者が多い 料理をつくる人(つくりたい人)も多い	アデラ断層で陶器づくり 稲作、草木染め
子ども・高齢者の居場所	親戚・友人の宿泊施設
家に独りであるのではなく、 そこに行けば、誰かがいる環境	知り合いが来てても、滞在して もらう場所がない
画廊	山村留学
加子母の有名画家の展示 村内でも創作活動が盛ん(絵画など)	林業、農業、漬物の漬け方を 覚えて帰る

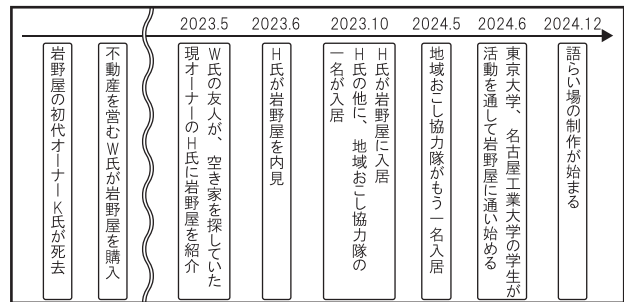


図8 岩野屋の活用経緯

	北側はなれ	南側軒下
長所	活用が進んでいない北側空間の活用	前面道路からの視認性が良く、集しやすい
	前オーナーが食の空間として利用していた場所の記憶を継承	窯利用時に屋内外の動線が取りやすい
短所	小川や木々などの自然を間近で感じられる	日当たり良く、目の前に広がる山々を眺めることができる
	建物裏への設置で前面道路からの視認性が低く、周囲から活動の様子が見えにくい	駐車スペースの減少
	窯利用時に屋内外の動線が取りにくい	周囲からの視認性がよい反面、プライベート利用がしづらい
	北側で日当たりがよい	

図9 窯の設置位置検討

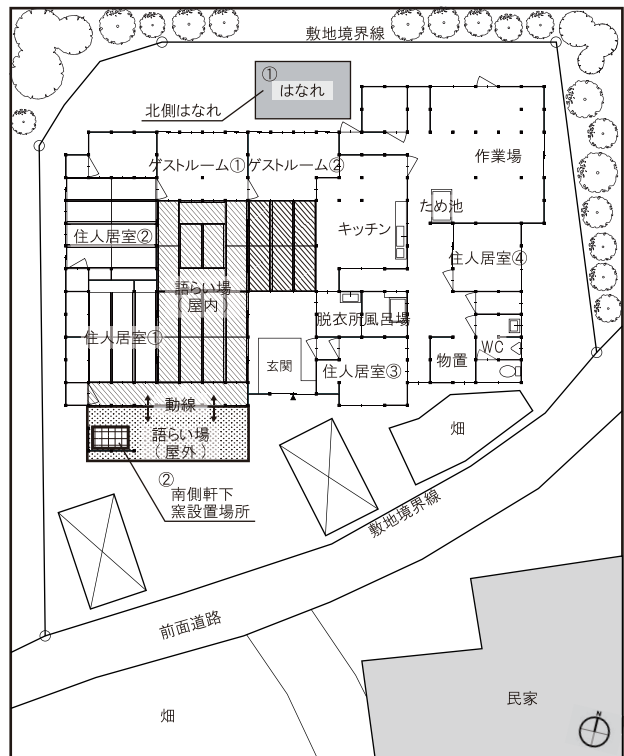


図10 岩野屋 配置図兼1F平面図 1:300

【語り場】制作にあたっての作業期間は全7日間とし、①水平をとるための基礎制作2日間(図11)、②コンクリートブロックを積み上げる土台制作2日間(図12)、③耐火煉瓦を使用しての窯制作3日間(図13)の3段階に分けて実施した。

開催日時	2024年12月5日(木)-12月6日(金)	
場所	岩野屋(加子母中桑原4395)	
参加者	地域づくり協力隊 2名、東京大学 清家研究室 1名	
運営	名古屋工業大学 加茂研究室 1人	
内容	基礎型枠作成、コンクリート練り混ぜ・打設・養生	
活動風景		

図11 基礎制作

開催日時	2024年12月7日(土)-12月8日(日)	
場所	岩野屋(加子母中桑原4395)	
参加者	地域づくり協力隊 2人、加子母木匠塾生 2人	
運営	名古屋工業大学 加茂研究室 1人	
内容	コンクリートブロック積み上げ、天板設置、レンガ加工	
活動風景		

図12 土台制作

開催日時	2024年12月9日(月)-12月11日(水)	
場所	岩野屋(加子母中桑原4395)	
参加者	地域住民 1人、地域づくり協力隊 2人、加子母木匠塾生 2人	
運営	名古屋工業大学 加茂研究室 1人	
内容	焼床敷き詰め、窯ドーム積み上げ・仕上げ、煙突積み上げ	
活動風景		

図13 窯制作

開催日時	2024年12月17日(月) 18:00~22:00	
場所	岩野屋(加子母中桑原4395)	
参加者	地元小学生 3人、加子母住民 10人、地域おこし協力隊 2人	
運営	名古屋工業大学 加茂研究室 1人	
内容	交流会・分科会、ピザづくり、地域づくりについて語り合う	
活動風景		

図14 地域づくり交流会

4-4. 地域づくり交流会の開催(WS④) 制作した【語り場】を活用し、地域内外の人が集い交流をすることを目的として窯でピザづくりをする食のイベント「地域づくり交流会」を開催するとともに、地域づくり分科会の定例会も併催した(図14)。

【5】 地域づくり交流会後のアンケート調査 地域づくり交流会では幅広い年代、職種の人が集まり(図15)、地域づくり分科会に所属しない人が全体の半数近くを占めた(図16)。来場した大人、児童それぞれに対してアンケート調査を行なった。

5-1. 大人対象アンケート結果 質問事項として①地域づくり交流会の効果、②次回開催の希望有無と希望する企画内容、とした。開催した効果として、参加者に心理的効果、機会的効果、交流/体験効果の3つの効果が確認できた(表2)。心理的効果としては「心のレベルのつきあい」「広い繋がりのお手紙がもらえる」といった気兼ねなく話ができたと回答が見られた。機会的効果としては「地域内の活動を知り、参加するきっかけ」「普段会う機会がない人との対話のきっかけ」といった日常生活ではあまり関わることのない活動や人との繋がりが生まれたという声があった。交流/体験効果としては「多世代交流」「持ち寄った食材の活用」「田舎特有の体験」「空き家活用による地域住民との交流」ができ、窯による空き家活用によって多世代交流が生み出されただけでなく、加子母の特色である持ち寄った食材を味わう体験もできたという回答が得られた。次回開催への希望有無は、全員が次回の開催を希望し、イベントの効果認められる回答を得た。次回の開催に向けては、「ピザや鍋、BBQなどの食べ物を作って食べるイベント」を希望する声が多く、食を通しての交流が好まれることが確認できた(表3)。また娯楽やものづくり、加子母の文化体験の場としても窯を利用したいという回答も得た。

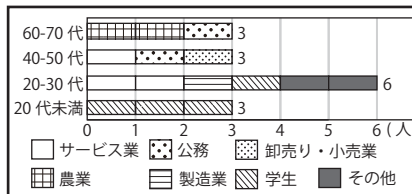


図15 地域づくり交流会参加者の年齢と職業

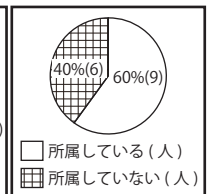


図16 分科会への所属有無

表2 地域づくり交流会の効果に対する意見

心理的効果	機会的効果	交流/体験効果
心のレベルのつきあい(1)	普段会う機会がない人との対話のきっかけ(1)	多世代交流の場(3)
近隣の人と仲良くなる(1)	普段できない話題の提供(1)	持ち寄った食材の活用(1)
多種多様な人が集うことによる広い繋がりのお手紙の構築(1)	地域内の活動を知り参加するきっかけ(1)	田舎特有の体験(1)
		空き家活用による地域住民との交流(1)

表3 次回開催に希望するイベント

食		娯楽	文化
ピザ(2)	鍋(2)	コンサート(2)	風習体験(1)
餅つき(1)	郷土料理(1)	カラオケ(1)	ものづくり
バーベキュー(1)	焼きリンゴ(1)	ヨガ・体操教室(1)	陶器づくり(1)
お茶会(1)	食べ物(2)		

**5-2. 児童対象アンケート結果** 児童の参加者として加子母地域に住む6、8、10歳の3名が参加した。質問事項として、①今回のようなイベントにまた来たいか、②大人とたくさん話ができただか、③窯でピザをみんなで作るのは楽しかったか、④友だちを誘いたい、とした。結果は、①～④どの質問内容についても全員が「また来たい」「話ができただ」「楽しかった」「誘いたい」と、イベントの効果が認められる高評価の回答を得た。またイベント中の会話で、加子母内の大学生の活動に興味があるかという質問に対して、「興味があり、ぜひ参加したい」という声を得られた。これらの結果から、大人だけでなく児童にとっても交流の場としての機能を果たしていることが確認された。

**5-3.WS後の空き家活用への認識** 今後どのような人に空き家活用に携わってほしいか問うアンケートに対して、最も多かった意見は地域住民だけでなく、地域外の人とも協力して空き家活用をしていくべきだという意見であった。学生の空き家活用へのアイデアを期待する意見もあり、地域外の人にも空き家活用に携わってほしい理由としては「人口減少であるため、少しでも人手がほしい」「多様な意見が集まることで新たな解決策が見つかる可能性が高まるから」という意見があった(表4)。また、「空き家活用についてイメージで話す人が多く、みんなが実際に携わって現状を知っていく必要があるから」という意見もあり、まずは活用の現場に入り込み、みんなが当事者になることが大切だという回答も得られた。



図 17 岩野屋の住民が窯を使って近隣住民と交流している様子

**【6】結論** 今回のWSを通して、食を共に作り、食べながら語り合う空間は世代や職業、出身地の垣根を超えて人と人の繋がりをより強く結ぶ役割を果たすことが確認できた。また地域づくり分科会を併催したことで、普段は会議に参加しない人もその会議でどのようなことが議論されているのかを知るきっかけになり、知り得なかった地域での活動を知ってその活動に参加していくきっかけの場となった。現状では加子母地域内での活動はそれぞれの団体内で個々に完結しており、互いの活動を知り、刺激し合う機会が少ない。そのため本研究によって生まれた、様々な団体や人々が交流できる場を構築することは、より強く地域との関係をもつ活きた活動を生み出すことに繋がるのが確かめられた。

**【7】展望** WS開催後も岩野屋の住人が地域住民との食を通じた交流を【語り場】で行なっているという状況が確認できた(図17)。空き家であった岩野屋が若い世代に受け継がれ、本研究で制作した【語り場】を活用して地域外来訪者だけでなく、地域住民も集い「加子母で活動している人」「その活動に興味がある人」「将来活動をするかもしれない人」を繋ぐ場として、より機能を強めていくことが期待される(図18)。中山間地域の魅力を活かして学生の活動を誘致し、その土地に愛着を持つきっかけをつくることで、学生が卒業後にもその土地を訪れて移住の動機へと繋がってゆく。今後筆者も岩野屋を訪れながら加子母との繋がりを保っていききたい。

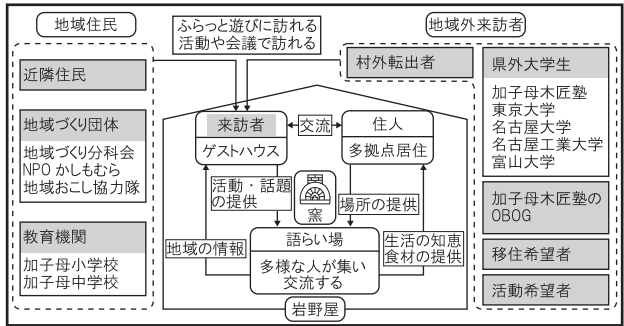


図 18 岩野屋今後の展望図

表 4 今後の空き家活用に携わってほしい人とその理由

回答者	木匠塾の学生・OBOG	県外からの大学生	移住者	地域住民	誰でもよい	選択した人に空き家活用に携わってほしい理由
①	●	●	●	●		いろいろな人材が集まるのが大切だから
②	●	●	●	●		多くの人、多様な人が加子母に住んでほしいから
③	●	●	●	●		外から見た目が必要だし、地域住民の考え方も知って欲しいから
④	●	●	●	●		様々な分野の人が集まり、専門家と共に一緒に考えていく必要があるから
⑤	●	●	●	●		様々な分野、年代の人がみんなで協力合って、空き家の問題解決に当たるべきだと思うから
⑥	●	●	●	●	●	人口減少でこれからどんどん空き家が増えていくので少しでも考えてもらえたらよいから
⑦	●	●	●	●	●	空き家対策についてイメージで話す人が多く、みんなが実際に携わって現状を知っていく必要があるから
⑧	●	●		●		学生による活用のアイデアで、地域住民との交流の場に活用したいから
⑨				●		住んで人が使える場所がいいと思うから
⑩				●		加子母のことを加子母で暮らす人たちと一緒に考えたいから
⑪					●	空き家活用に興味ある人、過去に空き家活用に関わりある人、色々な方の意見を聞きながら関わってほしいから
⑫					●	その地域を好きになってくれる人・物件に愛着を持ってくれることを前提として、思いもよらない突飛なアイデアの実現によって活用の大成功につながると思う固定された人だと新しいアイデアが入ってこないで、外部の人も若い人もクリエイティブな人も入り込める隙間があるとよいから

【注釈】 1: 本研究では「居住されていないことが、常態である」ものを空き家と定義する。2: 1995年以降、加子母を拠点に木材加工や木や森に関する知識を学ぶ木育を通して地域との交流を行なう8大学合同の学生団体。3: 加子母むらづくり協議会の10ある分科会のうちの1つ。4: 加子母各区にそれぞれ1～2名の委員が存在し、空き家の登録、入居希望者の空き家案内、マッチング、入居完了までを支援する。5: 中津川市では令和6年に加子母地域に2人を迎え「城学連携事業(大学と加子母との連携)」推進や農村型の地域運営組織の推進、地域情報の発信などの活動を通して地域の活性化に取り組んでいる。